知っておきましょう

お医者さんのかかり方

いま、医療の現場、なかでもとくに救急医療の現場は大変な状態になっています。休日や夜間、軽症の患者が救急病院にかけ込むケースが増え、救急患者のたらい回しが発生するなど、緊急性の高い重症の患者の治療に支障をきたしたり、病院に勤務しているお医者さんへの負担が過重になるなどの原因にもなっています。

一人ひとりがマナーとルールを守って受診すれば、いざというときに必要な人が安心して医療が受けられます。もちろん、限りある医療費という資源も有効に活用できるようになります。

良くない受診 Change! 正しい受診へ

受診のマナーとルー ルを守りましょう。

1 良くない受診 休日・夜間に病院にかけ込む

休日や夜間に開いている救急医療機関は、一刻を争う緊急性の高い患者を受け入れるためのもの。平日や日中、病院を受診する時間がないからなどの理由で、自分の都合で救急医療機関に行くのはやめましょう。

また、休日や深夜（22 時～ 6 時）に病院・診療所に受診すると、たとえば初診の場合、休日加算 2,500 円、深夜加算 4,800 円がそれぞれ医療費（初診料）に加算されるため、家計負担も重くなることを知っておきましょう。

Change!

インターネットの情報サイトを活用したり、病気の予防知識を身につけるなど、日ごろから健康管理に気をつけましょう。

また、とくに子どもの急病の場合には、まず電話相談などを利用したりしてみましょう（最終ページ参照）。

2 良くない受診 なにがなんでも大病院

大病院は専門的な検査や治療、医師の教育を行う役割をもっています。ちょっと体調が思わしくないから、とすぐに大病院に行くのは、より高度な検査や治療を必要としている患者への妨げとなることもあります。

Change!

自宅や勤務先の近くの医院・診療所などにかかりつけのお医者さんを持ち、気になることがあったら、まずはそのお医者さんに相談しましょう。もしも、大きな病気が疑われるようなときには、高度な医療が受けられる大病院等に紹介状を書いてもらうことができます。

3 良くない受診 はしご受診をくり返す

同じ病気で、あちらの病院、こちらの病院と何軒もの病院にかかるのは、同じような検査がくり返されたり、同じような薬が処方されるので、医療費がかさむだけでなく、かえって体に悪い影響を与えることも。

●転医をくり返すと、初・再診料だけで 2 倍にも

	同じ病院に通う場合	転医をくり返した場合
1 回目	初診料 2,700 円（+検査料等）	初診料 2,700 円（+検査料等）
2 回目	再診料　690 円	初診料 2,700 円（+検査料等）
3 回目	再診料　690 円	初診料 2,700 円（+検査料等）
合　計※	4,080 円	8,100 円

※初診料と再診料の合計額。検査料等を加えると、その差はさらに大きくなります。

Change!

受けている治療に不安があるときには、まずはそのことをお医者さんに伝えて話し合ってみましょう。また、主治医以外のお医者さんの意見を聞きたいときは「セカンドオピニオン」という方法も。セカンドオピニオンはれっきとした診療行為の一つです、迷わず申し出てみましょう。

薬を上手に利用しましょう

薬のもらいすぎに注意

薬が余っているときは、お医者さんや薬剤師に相談してみましょう。

のみ合わせによっては副作用が…

お薬手帳を有効に活用して、いま処方されている薬をお医者さんや薬剤師に伝えて、のみ合わせに注意しましょう。

ジェネリック医薬品（後発医薬品）の利用を

先発医薬品よりも費用が安く済みます。お医者さんや薬剤師にジェネリック医薬品の利用について相談してみましょう。

「明細書」を活用しましょう

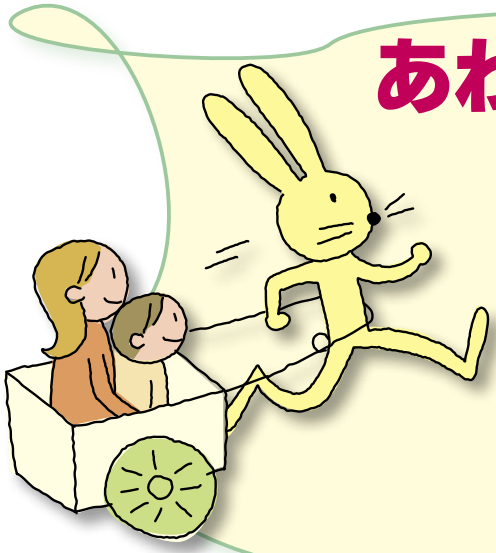
～原則として無料で発行されます～

従来から発行されていた「領収証」では知ることのできなかった診療内容が詳しく書かれているのが、「明細書」です。これが平成 22 年 4 月から原則として無料※で発行されるようになりました。明細書には、受けた検査や治療内容が詳しく記載されています。そして、どんな診療にいくらかかったのかも知ることができます。

わからないことがあったら、医療機関に問い合わせてみましょう。

※すべての医療機関ではありません。

あわてて病院にかけ込む、



その前に

いますぐ受診する必要があるのか、平日の時間内の受診でも大丈夫なのか、小児救急電話相談（＃8000）や、救急相談センター（＃7119）に電話して相談してみましょう。

- **小児救急電話相談（＃8000）**では、小児科の医師や看護師から症状に応じたアドバイスが受けられます。
  ※利用できる時間はお住まいの自治体によって異なります。
- **救急相談センター（＃7119）**では、救急車を呼んだほうがいいのか、病院へ行ったほうがいいのか、緊急性の判断や応急手当のアドバイス、医療機関の案内などが救急隊経験者や看護師から24時間受けられます。

からだに異変を感じたとき、子どものようすがいつもと違う……などなど、
症状について少しでも知識があれば、適切に対応することができます

いざ、というとき生命を守ります

こんなときは迷わず救急車を

突然死する原因には、おもに心臓発作と脳卒中があります。
つぎのような症状がある場合には、ためらわず救急車を呼びましょう。

急性心筋梗塞

心臓発作のなかで多いのが急性心筋梗塞です。

つぎのような症状が急にあらわれます。

- 胸の真ん中の強い痛み（痛みがあまり強くない場合もある）
- 肩や腕、あごにかけての痛み（痛みがあまり強くない場合もある）
- 息切れ
- 冷や汗
- 吐き気
- 立っていられない
- 胸が締めつけられるような圧迫感（痛みがあまり強くない場合もある）

脳梗塞

脳卒中のおもなものに、脳梗塞とくも膜下出血があります。

つぎのような症状が急にあらわれます。

- 体の片側に力が入らない、しびれを感じる
- ことばがうまく話せない
- ものが見えにくい
- 反応がない

くも膜下出血

今までに経験したことのないような（バットで殴られたような）強い頭痛

子どもの急な発熱のとき

子どもは夕方から夜にかけて発熱することが多いものです。もし、38.5度くらいまでで機嫌よく遊んでいたり、いつものように眠っているようなときは、あわてずにようすをみましょう。

39度などの高熱になり、機嫌が悪くなったり、ぐったりしているようなら、診察を受けましょう。

熱が上がるときに、けいれんをおこすことがあります。初めてのけいれんや、長時間続くけいれんのときは、診察を受けましょう。

01801003-101-701-1006 ©法研2010